

# 仕事ないし、沖縄嫌い、人も嫌い

——沖縄のヤンキーの共同性とネオリベリズム——

打越 正行

karp@mail.goo.ne.jp

本稿は、沖縄の若者が地元や就労世界において構築する沖縄の共同性を分析し、もって現代社会の排除の一端を描くものである。本稿の主な対象は、中学や高校を離脱し、不安定な就労環境にあるヤンキー（暴走族を含む）である。ヤンキーとは、地元生活拠点をおき、そこで仲間とさまざまな資源を直接に共有していることに特徴がある下層若者である。そのヤンキーの文化や実践のなかでも、特にシゴキをとまなう社会化の分析を行った。その分析のためには、ネオリベリズム（ネオリベ）を分析概念として設定し、議論を展開した。例えば、エイサー青年会では、ネオリベによるローカル性の排除によって、社会化が機能しなくなり、建築現場では各労働者が個別化され、共同性が解体されつつあることをみた。その結果、共同体の新参者を育てあげる社会化としてのシゴキは、ただ排除するためのリンチへと変化しつつあった。ネオリベは経済的搾取を強力に進めるが、それはヤンキーの共同性をも侵食するし、またそのような周辺にある若者から侵食していく。また、搾取、排除と反抗がせめぎあう共同性を詳細に分析することで、ネオリベがヤンキーを代替可能な労働力として、搾取、排除するのに対し、ヤンキーの共同体やそこでの実践は、偶然性と非合理性を生み出すことで、代替不可能な仲間を再生産していることを指摘した。最終的には、これらの議論が日本（人）にとっていかなる意味を持つのかを論じた。

キーワード：ヤンキー、沖縄、ネオリベリズム

## 1 問題提起

本稿は、沖縄の若者が地元<sup>1)</sup>や就労世界において構築する〈(沖縄的)共同性〉を分析し、もって現代社会の排除の一端を描くものである。本稿の主役は、沖縄の中学や高校を「離脱」し、不安定な就労環境にあるヤンキー（後述）である。タイトルの「仕事ないし、沖縄嫌い、人も嫌い」は、あるヤンキー少年が語った言葉である。沖縄は、多くの慢性的な失業者を抱えてきた。しかし彼・彼女らの存在は、厳しい境遇を「なんくるないさー（なんとかなるよ）」と考え、乗り越え

ようとする沖縄人<sup>2)</sup>の生活観や、苦難を共同で解決するネットワークゆえに、社会問題として扱われることはまれであった。谷富夫は、沖縄のなつながりをおおらかな金銭・時間感覚、「人情」溢れる対人関係、精神的豊穡と経済的貧困等々が混淆するゲマインシャフト的の第一次関係と特徴づけた[谷 1989: 297]。たしかに沖縄には日本とは異なる固有の文化がある。たとえば、地域の共同性や、沖縄の外で暮らす人々の同郷ネットワークは、今日も強固である。ただその強固さは、彼・彼女らの厳しい生活がよぎなくしたものである。そこに、沖縄人の生活態度の強かさを読むことができる。しかしながら、桃原一彦は、日本人研究者が植民地社会の労働の世界を「隙間産業の創出」と解釈することを批判した[桃原 2007: 298-300]。たしかに、沖縄の共同性を「強かさ」としてのみ解釈することは誤りである。沖縄の共同性は、つねに相互の扶助として機能するとはかぎらず、時として相互の排除を伴うものでもある。「仕事ないし、沖縄嫌い、人も嫌い」と嘆いた少年は、学校と就労世界から排除され、最後の拠り所となってきた地元の共同体からも排除された少年であった。沖縄のヤンキーたちには、「なんくるならんない」現実がある。少年は、その現実の只中でこの言葉を吐いている。彼が、沖縄を、そして地元の人々とのつながりまでも嫌いになっていった背景には、なにがあるのだろうか。そこで本稿では沖縄の共同性を、谷が指摘するような強固でゆたかなつながりとしてのみ着目するのではなく、桃原が指摘し、またこの少年が語るような排他的な共同性が、日本(人)にとっていかなる意味を持っているのかといった問いを考察していきたい。

本稿が沖縄をフィールドとする理由は、二つある。一つ、日本は、今日なお沖縄と植民地主義的な関係にある。ゆえに、被植民地の位置にある沖縄から日本をみることで、日本の植民地主義の意味を的確に把握するためである。搾取や排除は、まず周辺(植民地)で生じる。ゆえに、日本と沖縄の関係自体を射程に入れた上で、沖縄でどのような搾取や排除が生じているのかを記述し、最終的にそれを日本の問題として考察していきたい。二つ、本稿が、搾取や排除、それらへの反抗の実践を、沖縄の共同性を鍵概念として、その具体的な生活の場で分析を進めるためである。なぜなら搾取や排除が実施されるのも、またそれへの反抗が実践されるのも、彼・彼女らの共同体で起こっている事象だからである。佐藤郁哉は、一連の暴走族の研究を行った[佐藤 1984, 1985]。P. Willisは、労働者階級の「野郎ども」の研究を行った[P. Willis 1977=1996]。しかしそのいずれも、暴走族や野郎どもによる社会変革の可能性について、あたかも彼らが特別な能力や条件を持っているという前提のもとで議論している。しかしながら、それは事実とは異なる。彼・彼女らは、実際は、そのような特別な能力や条件をもつ人々ではないし、ゆえに、往々にして社会の表舞台に立つことはできない。とはいえ、彼・彼女らは、裏舞台である生活の場(共同体)において、搾取や排除にさまざまなやり方で反抗している。ゆえに、搾取と排除、反抗のせめぎあいを沖縄の共同性において、ミクロに分析することは、かわらず重要である。本稿は、その一つの試みとしてある。

今日、若者の就労環境は、沖縄だけでなく、日本でも厳しい。若者の就労問題は、とくに都市に突出している。しかし、都市で働くのは地方から出てきた若者である。なかでも沖縄は、戦後ずっと日本に多くの労働力を供給してきた。そのなかで、今日のネオリベリズム(以下、ネオリベ)は、沖縄のヤンキーの就労環境を変えつつある。それはまた、日本(人)にとって重要な社会的意味をもっている。本稿は、こうした背景を念頭に、沖縄のヤンキーの就労環境と仲間集団に

着目し、そのなかで、彼・彼女らがどう生き抜き、疲弊し、反抗しつつあるのかについて分析していく。

## 2 調査方法

筆者は、沖縄をフィールドに、2007年6月から12月の間の計13週間にわたり調査を行った<sup>3)</sup>。調査は、参与観察と聞き取りを中心に行った。そこでは、少年・少女たちの活動に部分的に参加し、計166名の暴走族やヤンキーの少年(少女だけの暴走族である「レディース」等の21名を含む)から話を聞き、その内4グループの10名に対して集中インタビューを行った。最初は、暴走中の暴走族を原付バイクで追走し、コンビニなどで休憩している最中に話を聞いた。ある程度の信頼関係ができると、暴走行為、その合間の談笑、アジトでのバイクの改造の手伝い、検問の有無を確かめる下準備、写真撮影などの活動に参加した。調査では、参与観察に徹するために録音機は使わず、活動や会話を時々メモし、調査後により完全なフィールドノートの作成をめざした。

## 3 沖縄のヤンキー

調査で明らかになった沖縄のヤンキーとは、次のような若者たちである。

### 3.1 学校・職場・ストリート

ヤンキーたちは、どうして学校で将来に役に立たないことを勉強する必要があるのかという疑問を抱いている。また、学校や職場、ストリートで、どうして自分(たち)だけがいつも怒られるのか、どうして自分(たち)だけが警察に捕まるのかという不公平感を抱いている。

[普段は何してるの]家でぶらぶらするか、働いてる。[学校行かなくて大丈夫なの]義務教育だから行かなくてもいいわけよ。[どういうこと]高校だったら卒業日数とかあるさー。けど中学はそんなことしなくても卒業できるさー。[なるほど。卒業したらどうするの]働くよ。そのために今から働いてるわけよ。(翔 中学3年 6月23日深夜、北谷町ホッパー前駐車場)

[午前3時頃、アヤノがあくびをしていたので、明日の学校は遅刻するのではないかと声をかける]12時半に学校行って、給食たべたら帰るから大丈夫。[給食のために学校いくの]他にすることないし・・・。(アヤノ 14歳 10月16日深夜、宜野湾市内マック前)

[みんなで警察への不満を語っている場面で][パトカーの]ガラス割ってないのに、自分が疑われた。[取調室で自分が]やってないと2、3時間言い続けた。ナンバーはどのバイクも隠しているんで、特定できないのに、警察はバイクの色、型などで、自分を疑ってきた。「そんな言うんだったら[認めないのだったら]、おまえが真犯人見つけれ」っていわれた。やってもないのに、やったことになってた。[認めないのだったら]3日間くらい、くびらそうね[留置所にいさ

せるぞ]ってなる。[やってもないのに、こんなことになるのは]ひきあわない[つりあわない]。  
(良太 16歳 11月13日深夜、浦添市内ローソン前)

翔やアヤノにとって、学校は勉強をしに行くところではない。翔には、学校に行くことより、卒業後に働けるよう準備しておくの方が大事である。アヤノには、学校は給食を食べにいく程度の価値しかない。学校は、彼・彼女たちの生活や将来にとって、ほとんど役に立たない。

良太は、警察に不信感を抱いている。多くのヤンキーが、彼と同様の経験をしている<sup>4)</sup>。公道での検問で、他の車両は素通りできて、彼・彼女らは免許証の提示を求められる。車両違反をしていない場合でも、そのように扱われる。ヤンキーたちは、こうした経験を共有し、そこから、社会への反抗的な意識を形成していく。

### 3.2 就労環境

ヤンキーたちは、たいてい、中学を卒業して働くか、定時制高校に通学しながら働くか、高校を中退して働いている。彼・彼女らが朝まで暴走したり、それを見物したりすることができるのは、次の日に仕事がない場合が多いからである<sup>5)</sup>。暴走族や(見物するかたちで暴走行為を支える)ヤンキーは、不安定な就労や無職にある場合が多い。また仕事をもつヤンキーも、苛酷な就労条件のもとにある。沖縄では、男性は建築作業などの肉体労働、女性は深夜のサービス業が、おもな職種である。沖縄の外で働く場合は、男女ともに季節労働(以下、キセツ<sup>6)</sup>)が多い。日本で何度も就労経験のある健太(24歳)によると、日本での賃金は、建築関係の仕事で沖縄の2倍、普通の仕事で1.5倍はあるという。この賃金格差が、若者たちの日本へのキセツを促している。とはいえ、日本の職場に、沖縄の若者を適正に受け入れるような条件はない。

キセツは途中で帰るときは、給料不払い、飛行機代自腹はしょうがないですよ。引き合なないけど、その覚悟で行ってますから・・・。(健太 9月3日深夜、国道58号線沿いの宜野湾市内マック内駐車場)

[来週からキセツに行くことが決まっていたので]先に荷物を送って、行く準備もしてたから、[直前に仕事の]条件が変わっても、仕方なしに行った。(誠 23歳 8月30日深夜、北谷市内ホットスパ前駐車場)

キセツは、なにかの事情で中途離脱すれば、賃金から諸経費(家賃、光熱費、飛行機代等)が差し引かれる。その結果、1ヶ月働いて15万円になるはずの賃金が、5万円にしかならないこともある<sup>7)</sup>。キセツの労働条件は不安定である。多くの若者が仕事を途中で辞めていくが、その理由のひとつは、仕事場で直面する抑圧的な日本文化にある。異文化への強制的な適応は、沖縄の若者の、移動に伴う孤独・疎外に拍車をかける。彼・彼女らが、日本の就労環境に適応することは容易ではない。

日系人、沖縄人は、[日本人の]言葉がきついのと、歩くペース、仕事のペース[の違い]で、

職場に馴染むのがむずかしいですね。沖縄人は東京の言葉をきついと感じたり、仕事をとろいと捉えられるみたいで・・・そういう、ちょっとした一言が[彼・彼女らを]傷つけることは多いです。(日本への派遣業を行う会社の沖縄・離島生まれの面接官 9月4日夕方、那覇市内の会社)

こうした文化的抑圧に直面した沖縄人は、自らの文化を捨て、日本人に都合のいい沖縄文化を身につけ同化をめざすか沖縄に帰り失業者となるかのいずれかを選択しなければならない<sup>8)</sup>。日本への移動をよぎなくされる沖縄のヤンキーは、このような文化的抑圧からくる孤独や疎外を経験するという点で、日本のヤンキーとは異なる境遇を生きている<sup>9)</sup>。

### 3.3 地元つながり

ヤンキーたちは、活動とともにする仲間と「いつもの場所(地元)」を介した共同意識を抱いている。彼・彼女らの多くは、携帯電話を持っているが、実際は、料金未納によって使用停止となっていたり、仲間うちのトラブルで沖縄から逃亡したり、鑑別所や少年院に入ったりなどで、携帯電話で連絡を取りあうことができないことが多い。そのため、彼・彼女らは、いつもの場所(地元)に集まることでつながりを維持している。このような場所を介した仲間意識は、これまで、いわば腐れ縁のようなものとして描かれてきた[瓜田 1975: 36-61]。たとえば、違法行為の結果、警察に補導されたとする。そのとき彼・彼女らは、仲間の違法行為について黙秘する。それどころか、仲間の罪まで被ろうとする。そこには、もし自分が仲間の立場であったらという想像力が働いている。しかし、警察の激しい取調べにより、仲間のことを話してしまうこともある。むしろそのことの方が多い。少年・少女たちは黙秘を貫徹できず、自白してしまう。仲間の自白により捕まった者は、自白した仲間を非難する。しかし同時に、自分が捕まっても自白してしまうことも十分知っている。ここでは、自白する／しないのどちらが本当の仲間のつながりなのか、ということあまり重要ではなく、どちらの場合も、仲間に対する想像力が働いていることが重要となる。たがいに裏切ったり裏切られたりする。その都度、つながりの強弱や中断はあるが、その過程で、仲間への想像力は変わることなく維持されている。その想像力が基盤にあるかぎり、再び地元に戻ることによってつながりなおし、最終的には〈腐れ縁〉となっていく。

### 3.4 知識・資源

沖縄のヤンキーは、学校や親から、生活のための知識や財を得ることが難しい。彼・彼女らは、学校で学習される言語ではなく、彼・彼女ら独自の「うちなーぐち(沖縄方言)」である、生活に密着した言語により仲間とコミュニケーションをとる。そして、自分の体験や身近な友人の話を糧に、生きるための知識を得ていく<sup>10)</sup>。そこでは、抽象的な他者ではなく、仲間によるつながりが行動の基盤にあり、そこで、彼・彼女らの生活世界が作り上げられていく。その知識は体系だったものではなく、また、必要な知識が必要なときに得られるというような効率のよいものでもない。

生活の用具は、個人が所有するものではなく、仲間と共有される。たとえば、携帯電話がそれである。料金不払いなどで携帯電話を使えない仲間は、友人の携帯電話が活躍する。タバコや

酒代等も、そのときもっている仲間が差し出す。警察の検問情報や仕事の情報も、仲間で回しあう。地元のマクドナルドも、友人の店員に頼んで、深夜から早朝まで溜まり場や仮眠の場として利用する。このように、彼・彼女らは、さまざまな生活資源を分かちあい、利用しあう。それは、もたざる者がとりあえず生き延びる知恵・工夫としてある。ここに、生活資源を分かちあい、交換しあうヤンキーたちの文化をみることができ。さらにそのことを、沖縄の暴走族に関する情報サイトでのやりとりを通して確認しよう<sup>11)</sup>。

昔はサイトとか無くても、追悼〔暴走〕とかイベントがあれば族どうしの口コミでギャラリーはあつまってたのにねえ。ってかサイトでしか情報が分からん人は変なの〜だろ。(匿名による投稿 11月5日)

〔暴走に関する情報を執拗に求める投稿に対して〕いつから族は、〔暴走に〕出るのに告知しなきゃならんば? 言われなくても出たいときに出るあんに? ギャラリーはギャラリーらしく自分の足で探せばいいやし。〔サイトの情報を〕ゆくし(嘘)とか言う前に、サイトを当てにしてるほうが馬鹿だろ。あと、確かな情報が回ってこないサイトギャラリーは、「へんなの〜」じゃないかな?(しょうもなによる投稿 11月5日)

このように、暴走族についての情報は、サイトを通してまとめて分配されるものより、地元での口コミにより分配されるものの方が、より正確だといわれる。つまり、彼・彼女らにとって、地元の評判は、より大きな地域やメディアの評判より重要なものであり、よって地元につながるの若い若者は「へんなの(部外者)」として扱われる。またヤンキーは、以前より、言語より身体を用いてコミュニケーションすることで他者を了解し、物事を理解する傾向にあった[上之1980: 24, 30; 打越 2008: 33-6]。彼・彼女らにとって、直接体験したものではない擬似現実としての言語は、生活に役立つ知識を教えるものではない。暴走するためのバイクの技術も、暴走して限界を知ったり、事故を繰り返したりするなかで学んでいく。人間関係も、現在の親友がかつてのライバルだったということは珍しくない。かつて殴り合った関係だからこそ、今は友だちになれる。このように、彼・彼女らは、以前から現在にいたるまで変わることなく、仲間とのつながりを通して、資源を直接に交換し、そして分かちあって生き抜いてきた。

### 3.5 暴走族とヤンキー

以上のことから、沖縄のヤンキーとは、学校や職場、ストリートから排除され、その境遇を地元で生き抜くなかで固有の文化(経験、言語、ネットワーク)を形成している若者<sup>12)</sup>である。彼・彼女らは、社会の周辺に追いやられた結果、蓄積した憤懣を、暴走や見物行為によって表現する。そして彼・彼女らは、他者によって支配された空間で支配者の資源を流用し、あえて非合法的な方法で自らの存在を表現する。なぜなら彼・彼女らは、社会的に搾取・排除され続けてきたので、自らのものや言葉を所有しない。よって、合法的な方法で自らの存在を表現することは難しい。よって、そこには仲間とともになんとか生き抜くための戦術としてのヤンキー文化が形成される。この文化は、社会変革へと導くようなものというより、最低限自らが生き抜くための

のであるが、その行為、思考はきわめて反抗的である。以下では、この文化をできるだけ真摯に翻訳し、そこでのせめぎあいを詳しく分析していこう。

また本稿に主に登場するのは、バイクを改造し、爆音を出しながら深夜の公道を集団で暴走する暴走族である。暴走族には少年が多いが、暴走行為を見物する若者には、2割から3割の少女が含まれる。彼女らの存在は、暴走族少年の活動に大きな影響を与えている<sup>13)</sup>。彼・彼女らは、暴走行為を行わず、見物というがたちで暴走を支援する。彼・彼女らは、暴走行為を煽って、ともに騒いで楽しみたい若者たちであり、また日頃より警察に対抗心を抱いている若者たちである。

#### 4 沖縄で何が起きているのか

沖縄人の青年が日本の派遣先の就労契約違反に対して、異議申し立てを行ったことが新聞で報道された[『沖縄タイムス』夕刊2007.5.26]。その記事で、沖縄のキセツの就労実態があきらかにされた。だがそれは、問題の氷山の一角に過ぎない。本稿が対象とするヤンキーも日本へのキセツの経験を持つが、その就労実態は、記事とほとんどかわらない。しかし彼・彼女らには、それは普通のことであり、今さら驚くようなことではないと思われる。彼・彼女らは、「うちなーんちゅ(沖縄人)」の先輩も同様の条件で働いてきたという話を聞いている。彼・彼女らは、雇用主に異議申し立てをすくらいなら、仕事をうまくやりこなす術を先輩に学んだ方がいいと考える。日本のどこに条件のいい仕事があるのか、仕事をどうこなしたらいいのかは、彼・彼女らにとって重要な情報である<sup>14)</sup>。こうした情報のネットワークを手づるに、沖縄のヤンキーたちは、厳しい環境を生き抜いてきた。そのなかで、彼・彼女らを支えてきたものこそ、仲間集団における共同性であった<sup>15)</sup>。それは、苛酷な労働のなかでやる気さえ失せたときに、友人と慰めあうといった程度のもろい共同性でしかない。しかしヤンキーにとって、「これといった理由もなく」ただ居続けることができる場所は、重要なものである。ところが今日、そのような、ヤンキーたちの駆け込み寺の役割を果たした共同性が変容し、解体されつつある。よって次に、仲間集団が変容する過程をみていく。そのために、ヤンキーたちの仲間内のやりとり、それを通した彼・彼女らの「社会化」に着目して、その過程を追いたい。というのも、その過程においてこそ、仲間集団の共同性が変容し、解体されているからである。

#### 5 ヤンキーの社会化とシゴキ

ヤンキーたちは、学校や就労世界から排除されてきた。他方、ヤンキーたちは、地域の青年会や仕事の現場(建設業が多い)において、アイデンティティを獲得し、集団の成員として社会化され、「大人」になってきた。上間陽子は、沖縄の青年会におけるエイサーの伝統的实践が、飲酒や喫煙などの逸脱行為を含みながらも、自己を表出する空間として機能していることを指摘した[上間 2007:80]。岸政彦も、ヤンキー少年が大阪の建築現場で建設労働者になっていく過程を描いている[岸 1996: 44-5]。

しかし、このような地域でのつながりや仕事の現場での社会化も、今日の沖縄では成立しが

たくなっている。いま、それらの場所の質が変容しつつある。それは、そこでみられる「暴力と社会化の関係」の変容にいちじるしい。青年会や仕事の現場は、そもそも、先輩の理不尽なシゴキが支配する排他的な場所であった。しかしそれは、新参者の社会化のためのさまざまな通過儀礼が行われる場所でもあった<sup>16)</sup>。つまりそこでは、シゴキと社会化が同時に行われていた。しかしシゴキは、いまや、社会化を伴わないたんなる暴力としてのリンチに変容しつつある。以下では、まず社会学における社会化の概念について確認する。次にその社会化ではとらえきれないヤンキーたちの社会化を提示する。そして、その社会化が、なぜ暴力をとまなうシゴキと不可分なのかについて述べ、それがリンチに変容していく過程をおいながらその変容のメカニズムを分析する。

個人が他者との相互作用を通じて、自己を発達させ、その社会(集団)に適合的な行動様式を獲得する過程。社会の観点からみれば、個人に社会(集団)の価値・規範・技能・知識などを習得させ、個人をその社会(集団)に適合的な存在にしていく過程であり、個人の観点からみれば、他者との相互作用を通じて、その社会(集団)にふさわしい行為を身につけていく過程である。[宮島 2003 : 101]

この定義は、個人と社会の関係という視点から行われている。しかしそれは、社会化のダイナミックな過程に言及していない点で、スタティックな定義に留まる。というのも、たとえ伝統的な文化であっても、これから社会化される者にとっては、最初から適合的な行動様式などありえないからである。つまり社会化とは、社会化する主体自身をも見失いかねないようなダイナミックな過程としてある。そもそも、何に対して社会化するのが明確に与えられていないこともある。社会化される者は、所与の社会(集団)における、最初は適合的かどうかさえ疑わしい行動様式を引き受けたり、拒絶したりする。そしてその過程で、アイデンティティの獲得と喪失を繰り返す。最後にはある文化を自らのものとするとしても、それまでの過程は葛藤に満ちている。社会化においては、この側面こそが重要である。上の定義では、所与の文化を受け入れる過程で生起する葛藤の問題が抜け落ちている<sup>17)</sup>。

このような社会化を行うためには、社会化する上の世代と社会化される下の世代は、メディア等の第三者を通してではなく、直接的・対面的なく真正な関係)になければならない。それでこそ、上の世代の文化が、下の世代に伝達される。ここで真正な関係とは、Levi-Straussの「真正さの水準」による2つの社会の区別に着想をえている。彼は「(近代人の社会は)一人の人間が他の一人によって具体的に理解されるということにもとづいてはいい。われわれ(近代人)の人間関係は、かなりの部分、書かれた資料を通じての間接的な再構成にもとづいている」[Levi-Strauss 1958=1972 : 407]と述べて、2つの社会の真正さの水準の違いを指摘した。これによれば、下の世代は、所属させられようとしている社会(集団)の文化を、正しいから引き受けるのではない。そうではなく、具体的な人間から伝達されるからこそ、文化を受け取り、それを正しいと思う。ゆえに、文化の伝達や社会化が真正な関係性でおこる際には、たんなる葛藤だけでなく、暴力や性愛というかたちの、他者の領域を侵す行為を伴うことが多い。というのも、人と人がつながって社会をつくる営みは、他者の私的な領域を侵すことなしには成立しえないからである。社



会を形成することは他者とつながることであり、他者とつながるためには他者を侵すことは避けられない。そのため、社会化の場面では、しばしば暴力などにより他者の領域を侵すということにもなる<sup>18)</sup>。

## 6 シゴキからリンチへ

地域の青年会と建築現場におけるシゴキはリンチに変容しつつある。そこにはネオリベが強力に作用しているというのが、本稿の仮説である。ではそれは、どのようにしておこっているのだろうか。

### 6.1 地元の青年団

沖縄舞踊のエイサーは、「うちなーんちゅ」としての誇りを回復する機能をもつ。またエイサーは、上の世代からの伝統の伝達であるだけでなく、下の世代による伝統の創造を伴う挑戦の実践でもある[上間 2007: 80-1]。沖縄北部の生まれで、南部の運送会社で働く拓哉(21歳)は、次のように語る。

北部は[南部と比べて]もっと仕事がない。今のところ[南部の運送屋]は給料いい。[いくらなの]6,000円。[だけど家から燃料入れて通ったり、弁当買ったりしてたら、4,000円くらいしか残らんやん]しかたないさー、それでも他よりいいのに一。(拓哉 7月9日深夜、国道58号線沿いのブルーシール前駐車場)

[地元の中学は]あわなかった。同窓会行くけど、おもしろくない。上の世代ともおもしろくない。シカトされたり、見てないふりしたりされる。地元だと、先生、警察より先輩が怖い。いじめもあったし。○○[地元名]の人は心が狭い。考え方が幼い、幼稚。ずっと根にもつし……。だから、ここ[南部]で働いているわけよ。北部楽しくない。仕事ないし、沖縄嫌い。人も嫌い。

[地元でエイサーはしなかったの]エイサーは強制だった。エイサーも嫌。[練習に]こなかったら、死なされる[殴られる]。先輩がいばってるのが一番嫌い。(拓哉 7月10日深夜、国道58号線沿いの浦添市内ローソン前駐車場)

祐樹(17歳)は、地元のエイサー青年団に参加したが、行く度にボコボコに殴られたり、金銭を要求されたりしたので、青年団を脱退した。学校から排除され、不安定な仕事に就くしかないヤンキーたちにとって、エイサーを行う青年会の異年齢階梯集団は、ヤンキーが主導権をとることのできる希少な場所である。しかし今日、ネオリベによって、その価値世界を単一化・同質化され、ローカルな社会化の意味が剥奪されつつある。青年会でアイデンティティを獲得すること、バイクでウィリーができるようになること、建築現場において仕事を任されることなどは、ヤンキーたちが大人になるための重要な通過儀礼であった。しかし、ネオリベによって場所のローカル性が消滅することで、多様な価値や地域での自立(大人になること)は、収入を得て経済的に

自立することに特化されていく。エイサー青年会における社会化やアイデンティティの獲得は、ローカルなものとして位置づけられ、見下げられ、その本来の意味を剥奪されつつある。こうして、新参者をシゴキを通して社会化し、矯正する必要もなくなる。その結果、上の世代の若者の青年団における役割も薄らいでいく。シゴキは、元来もっていた機能を失い、新参者を排除するリンチに変容し、上の世代の若者は、それによって自らの存在理由を確認するようになっていく。

## 6.2 建築現場

建築現場でも、ネオリベによる変化が生じている。沖縄の建築現場で働き、その後日本で働いた経験のある健太は、次のように語る。

半年間、建築現場でシゴかれた。自分は負けず嫌いなんで、[途中で辞めずに、自分をシゴいてたヤツらに]最後には認めさせた。上下関係が一番厳しいのが、沖縄。現場で働いてたら、ハンマーが飛んでくるし、安全靴で蹴られる。建築現場でのリンチはあたりまえ。ヤンキーだった人なら、みんな知ってることよ、こんなの。[先輩が後輩をシゴく時に]本気と手加減[の違い]をわかればいいんじゃない。(健太 9月3日深夜 国道58号線沿いの宜野湾市内のマック内駐車場)

この語りから、沖縄の建築現場で暴力が蔓延していること、健太がそれを区別して捉えていることが確認される。ネオリベが支配する今日、日本の公共投資によって沖縄の土木企業が潤うことはなくなった。徹底した合理化によって不要な公共投資はなくなり、工事契約時の談合や収賄も消滅した。建築現場の「テーゲー(いい加減、適当)文化」も解体されつつある。現場において仕事をサボるためには、仕事仲間との共同性が必要となる。それは搾取に抗う部分でもある。しかしネオリベは、労働者を個別化し、相互に監視させる。そのため、同輩に対して抜けがけで働くことが賞賛され、仕事の能率が悪い同輩が排除されていく。使えない仲間、同輩からすれば給料泥棒となる。彼を建築労働者として育てることはなくなった。後輩が早く仕事ができるようにならないと、作業班に課せられたノルマをこなすことができず、自分の負担が重くなる。こうしてシゴキは、先輩による(給料泥棒の)後輩に対する慢性的なリンチとなっていく。

健太はこれを、建築現場の暴力には「本気の暴力(リンチ)」と、「手加減された暴力(シゴキ)」と呼ぶ。彼は、手加減された暴力は本気の暴力と異なるという感覚を、日々の建築現場で学んでいる。彼は、自分に行われた暴力は手加減された暴力であり、最後には先輩を見返すほどの力をつけたという。手加減された暴力は、伸ばし、正すための暴力である。これに対して、たんに相手を脅すために行使される本気の暴力としてのリンチがある。そこに手加減はない。健太にはその種の暴力を見たことはあるが受けた経験はない。しかし、2つの暴力を嗅ぎ分け、自分が現場で正されようとしているのか、不必要な労働力として排除されようとしているのかを判断することは、死活のこととなる<sup>19)</sup>。そこには、社会化装置と不可分の統合のための暴力としてのシゴキと、たんに集団成員を物として扱い、使えない同輩を排除するための暴力としてのリンチがある。建築現場にもエイサー青年団と同じく、リンチが、蔓延しつつある。

### 6.3 分析

では、エイサー青年団と建築現場におけるシゴキのリンチへの変容は、ネオリベとどのように関係しているのだろうか。

ネオリベとは、「あらゆるものが金融化され、資本蓄積の権力の中心が所有者とその金融機関に移り、資本のその他の部門が衰退すること」と定義される[Harvey 2005=2007:28]。しかしネオリベの影響は、すでにみたように、経済領域に限られた現象ではない。ヤンキーたちは、地元青年会や建築現場において厳しい日々を過ごさざるをえなくなっている。ネオリベは、すべての生活領域を浸食していく力である。ネオリベは、搾取のために移民労働者に同化を迫る植民地主義とは異なり、搾取に加えて、支配や搾取への対抗政治や、日常生活の癒しやガス抜きの場所をも解体し、もって搾取と排除を強める<sup>20)</sup>。そして、その被害は、まずは持たざる者が被ることになる。ヤンキーたちは、搾取に対する最後の癒しの場、反抗の場であった砦の共同性を維持することさえ、むずかしくなっている。

このように、ネオリベは万人に自由を認めない。その搾取と排除は、社会の周辺部から進行する<sup>21)</sup>。ヤンキーたちは、学校や仕事の場で周辺的な位置にある。沖縄の被植民地的な関係に規定され、彼・彼女らは、自前の資源をもたず、自前の生活自立も容易でない。ゆえに、やむなく希少な資源を仲間と分かちあう方法で、あれこれの生活の問題にとりあえず対処してきた。しかしそれは、一定限度内での搾取を想定した対処法であり、それをもって、際限なく搾取を進めるネオリベに対処することは難しい。ゆえに生活資源の蓄えのないヤンキーたちは、最初にストレートな影響を被ることになる。本稿では、その表れをシゴキからリンチへの変容にみてきた。ネオリベは、地元・仲間集団や社会化を不要のものとし、それらがもつ人間的なリアリティを消失させる。もっぱら地元で生き、そこ以外に生活や関係をもたない彼・彼女らにとって、これは致命傷ともいえる。そこには、つながるための暴力は消滅し、たんに排除するためのリンチへだけが残った。こうして、ヤンキーたちがこれまで搾取に何とか対処してきた方法は、使いものにならなくなる。

## 7 ネオリベへの反抗

このようにネオリベは、ヤンキーたちの共同性を侵食しつつある。しかしながら、それはいまだに侵食されきってはいない。最後に、ネオリベの完全な貫徹を阻むものに着目することで、彼・彼女らの生のダイナミズムを描くことにしよう。

元暴走族の祐二(20歳)は、建築現場で働く友人の紹介によって就労し、一年以上働いている<sup>22)</sup>。彼の賃金は月に25万円で、各種保険に加入し、有給休暇もある。現役暴走族の栄太(23歳)は、友人の父親の紹介で大工として働き、月に30万円以上稼ぎ、車もバイクも所有している。また、現役で暴走活動を続けながら、仲間同士でバイク屋を立ち上げて、現在まで5年間にわたり経営している暴走族もある。

彼らに共通するのは、仕事の紹介や起業の際に、地元の知り合いに助けをもらっている点である。彼らは、他のヤンキーたちと比べて特別に能力があるというわけではない。彼らは幸運に

も、知り合いを通して現職に就いている。これに対して、先にみた厳しい仕事に就くヤンキーたちは、求人誌やハローワークを通して仕事を得ていた。祐二と栄太の事例はまれなものであり、地元の知り合いを経たとしても、厳しい仕事に就くこともある。厳しい仕事に就くか、比較的恵まれた仕事に就くかは、偶然によるところが大きい。しかしこの偶然性を排除するものこそが、ネオリベである。ネオリベは、資本にとって使えない人間が仕事に就くことを許さない。ネオリベは、すべての労働者を代替可能なものにし、労働力を流動化させ、搾取を効率化する。ところがヤンキーたちは、先輩と同輩との固定的な腐れ縁でつながりあうので、資本の力にとっては非合理的な存在である。そして彼・彼女らのしがらみ(共同性)における偶然性や非合理性は、彼・彼女らが代替や比較が不可能な存在であることを表している。

### 7.1 偶然性

たとえば、暴走族少年らはパトカーに公道で頻繁に追いかける。ある少年は捕まり、他の少年らは彼のおかげで逃走できる。バイクの性能が悪かったり、操縦技術が下手だったりして、捕まる少年もいる。しかし、いったん白バイに追いかけると、まず勝算がないことは、暴走族少年ならだれも知っていることである。つまり、白バイから逃げるのができたとしても、それは偶然にすぎないことを、彼らはよく知っている。たまたま、パトカーに目をつけられたバイクが捕まり、そうでないバイクが逃げられるだけである。しかし、逃げられた暴走族少年は、自分だからこそ逃げられたのだと勘違いする<sup>23)</sup>。この勘違いは、頭では偶然であることを知っていながらも、身体を通して学んだ感覚や技術がそのことを認めたがらない。彼らは、誰でもが捕まりえるなかの一人として、つまり代替可能な存在として逃げられたにもかかわらず、真正な水準でそれを経験し、また逃走後に地元に戻り仲間と語り合うことを通じて、その経験を代替不可能なものへと読み替える。なぜならその過程で、私には同じように見えるパトカーでも、少年らはどこの管轄で何の車種で、また時には追走方法のくせから運転する警察官までもを把握しながら逃走する。最初は警察も暴走族少年の誰でもいい誰かを捕まえようとするが、徐々に具体的な少年を把握しながら捕まえようとする。ここでは、警察白書のデータや、暴走族というカテゴリーによる排除が、一人の少年が一人の警察官に理解される補導へと変容している。これこそ非真正な水準における理解が、真正な水準のものへと変わった場面である。そしてこれは、ヤンキーが経験を語り合える地元でのつながりと、そこでの言語ではなく身体による物事の理解や社会化ゆえに、可能なことである。このようにみていくと、偶然性を生み出す地元でのつながりは、ネオリベが侵食を試みるものであると同時に、それを阻むものでもある。ネオリベが、代替と比較が可能な存在としてヤンキーを労働市場から排除したのに対し、ヤンキーは、地元での共同性をもとにして、自らが代替不可能な存在であることを確認する。ヤンキーの共同性には、代替不可能な自己を確認できる場面が、その他にも多数存在している<sup>24)</sup>。

### 7.2 非合理性

また、彼・彼女らの共同性における非合理性も、ネオリベが彼・彼女らを代替や比較することを阻むものである。地元における先輩や後輩とのつながり、そこでの仲間との多様な資源の共有、そしてシゴキを介する社会化は、ある能力を所有する成員を、適宜に配置することや、成員

が主体的に共同体やそこでの役割を選択することを前提としない。たとえば、バイクの操縦が飛び抜けてうまい少年がいたとしよう。しかし、先輩と後輩の上下関係は、先輩によって一方的に決められたすぐには理解しがたいルールが行使されることを通して守られる。この上下関係や活動の制限は、暴走族やその活動の活発化や、バイク技術の習得という目的からすれば、合理的でないようにみえる。しかし他方で、このシステムは、ある時間と場所を共有し、多少のシゴキを我慢すれば、労働市場における能力や、外見、出身、バイクの技術に関係なく、誰もが先輩になれる制度である。ネオリベの労働市場で代替可能な労働力として排除される少年も、ヤンキーの共同体においては、誰でもが先輩という地位を与えられ、先輩の風格を備えていく。より正確には、誰もが先輩としてシゴキあげられていく。つまり、目的とその実現のための手段といった合理的な思考によるのではなく、現にある共同体の維持と再生産が、至上の目的とされていく。そしてその過程では、所有する能力によって新参者を選別し、それに満たない者を排除する暴力のリンチではなく、能力の有無にかかわらず新参者を育てあげる社会化の過程で行使される暴力のシゴキが必要であることを確認できる。こうしてヤンキーたちは、合理的な思考や行動を基準としない社会化を通して、集団の成員になり先輩になっていく。彼・彼女らは、代替や比較が可能な能力によってではなく、仲間とのつながりや実践の蓄積、そしてシゴキによって社会化されることで、比較や代替が不可能な存在となっている。

### 7.3 分析

上でみたように、偶然性や非合理性を特徴とするヤンキーの共同体では、成員は代替不可能な存在であるため、ネオリベが侵食しにくいものであった。ヤンキーたちは、そこでアイデンティティを獲得し、仲間とつながり、社会化をなし遂げる。それらの人間の代替や比較の不可能性は、人間が人間であるための最後の砦となるものでもある。その意味で、先輩によって行われる、しばしば暴力を介する合理的とはいえない行動様式も、それが真正な水準で実施されている限り、代替や比較が不可能な成員を再生産するものであることから、ネオリベに対する反抗の実践とみなすことができるだろう。ひとし(19歳)の社会化の過程をおいながら、真正さの水準によって生じる看過できない違いを具体的にみていこう。彼には、風俗で働く彼女がいて、携帯電話は彼女の名義で契約し、月に5万円の料金も支払ってもらっている。彼は次のように語る。

[交際中に]内地へ働きに行く時に、アヤ[彼女の仮名]が引きとめようとするわけよ。おれはセルシオ[中古で50万円相当の車]欲しいから[働きに]行行っていったら、そいつが「行かないで、[私が]セルシオ買うから」っていうわけよ。迷ったけど、なんかこのままだったら、やばい感じがして買わなかった。[そうなんだ。危なっかしいけど、一線は超えないよね? ]だってヤバイでしょ。女に働かしてセルシオ買わすのは・・・エクスタシー[合成麻薬の一種]とか5万くらいで売ってるけど、それはまずいよ。かえれなくなるもん・・・。(ひとし 9月5日深夜 北谷市内ゲームセンター前)

このひとしの語りから、社会化とは、新参者が正しさやふさわしさの基準にそって、主体的に社会への適応を選択するような過程というより、往々にして危なっかしさを含む真正な関係性

における時間と場所の共有によって行われていることを確認できる。彼・彼女らは、危なっかしい先輩や仲間集団のもとで、時には間違えながら社会を生き抜く術を学んでいく。それは、ひとしか越えてはいけないう線を社会化のなかで習得していく一方で、ネオリベは福祉政策などの元来は効率性とは程遠い社会領域を容赦なしに侵食していることから明らかである。

ネオリベは、あらゆるものを金融化し、資本を権力の中心に集中させることであった。その過程で労働力は、代替／比較可能なものとして流動的に扱われるようになる。それに続いて共同体やそこにおける社会化のリアリティをも、ネオリベは消滅させていった。その結果、地元のみ拠り所を有するヤンキーは、労働現場の共同性を解体され、孤立し相互に監視させられることになった。

このようなネオリベの理解に対し、本稿では、共同性こそがネオリベの侵食を阻むものでもあることを具体的にみてきた。それは、人間を労働力として代替可能なものとして扱うネオリベと、ヤンキーの地元でのつながりや、シゴキによる社会化によって生じる成員の代替不可能性を参照すれば明らかであった。そして両者の違いは、原理的にはそれぞれの社会における人間のつながりの質、つまり真正さの水準の違いによって生じているといえるだろう。

## 8 結 論

本稿は、タイトルにあげた沖縄のあるヤンキー少年が、沖縄的共同性でいかに生きているのかを、ネオリベを分析概念にして考察した。具体的にはネオリベによってヤンキーの共同体の社会化で行使されていたシゴキがリンチへと変容しつつあることをみた。そして、桃原が批判したインフォーマルな労働形態の隙間産業の創生さえもが、現在の沖縄では成立困難となりつつあることを示した。桃原の批判に日本(人)が応える前に、沖縄はネオリベの影響によって、より深刻な状況に変容しつつある。このように植民地主義とネオリベは、現在の沖縄において密接に関連して存在している。ただネオリベは、植民地主義を強力に補助しているのであって、ネオリベの趨勢が強力になった今でさえ、その基盤には植民地主義が強固に存在している。

そして本稿では、ヤンキー少年が生活資源を分かち合い、それを直接に交換し合っていること、彼・彼女らの実践や関係が地元で構築されることによって、ネオリベの影響を最初にかつ直接に受けやすいことを指摘した。しかしそうだとすれば、資源を多く蓄積し、地元以外にも多くの生活拠点をもつことによって、ネオリベに反抗することは可能だろうか。そうではなからう。ネオリベは際限なく人間の生活領域を侵食するものであり、ゆえに資源や生活拠点の蓄積は、問題の先延ばしにしかならない。そうではなく、根本的には真正な水準に基づく共同性こそが、ネオリベに対する反抗を可能にするものではなからうか。

最後に、ここまでの議論は、日本(人)にとっていかなる意味があり、何ができるのであろうか。私は本稿の議論にそって、以下のように考える。沖縄に対する不平等な関係を知った日本人がやるべきことは、沖縄を搾取し続ける日本人共同体を捏造することではなく、日本人との真正な水準にある共同性を新たに想像し、沖縄(人)と平等を実現することである。つまり、日本人が、利益を受け続けるために知りもしない誰かと日本人であるという理由のみでつながるのではなく、沖縄から不当に利益を得る日本人に憤り、また植民者であることを反省し、自らの植民

者性の解体をとともに試みる共同性をつくりあげること、これらこそを日本人はやるべきではないだろうか。

## [注]

- 1) ヤンキーたちは生活する「地域」を「地元」と呼ぶ。先行研究にも「地元」をめぐる議論がある[新谷 2002 : 162-5]。これらの事情に照らして、本稿も「地元」と表記する。
- 2) 沖縄人は、日本人とは歴史的／文化的に異なる背景があること。また本稿では、日本人による沖縄人への植民地的な関係に焦点を合わせるため、野村浩也にならない沖縄人と表記する[野村 2005 : 17]。
- 3) 本文中に表記する日付は、すべて2007年のものである。よって月日のみを記す。
- 4) ただ実際には、良太のように冤罪であると逆らい続けるより、少しでも早く留置所を出ようとして妥協する場合が多い。彼・彼女らは、警察や社会に不信感を抱いてはいるが、警察や社会にあからさまに歯向かうのではなく、少しでもよりよい状況に調整し、最悪の事態を避けようとする。
- 5) 「〔沖縄は平日も暴走族がアツい(活発)ですよねえ、あれは次の日休みだからするわけですか?〕走ってるヤツは、だいたい働いてないよ。(聡史 19歳 10月19日深夜、国道58号線沿いの宜野湾市内マック内駐車場)」これ以外の典型的な事例として、キセツ(後述)から帰ってきて暴走する場合がある。また、暴走を繰り返し、警察に捕まりそうな少年にとっては、数ヶ月間沖縄から逃亡し、日本で働くという方法もある。調査でも、翌日からキセツなので当晩は派手に暴走するという事例や、キセツから帰って派手に暴走するという事例が、いくつか確認された。
- 6) 季節労働とは、北海道や東北地方の農民が仕事のない冬季に都会へ出稼ぎに出ることを指すことが多かった。今日の沖縄のヤンキーは、慢性的な失業状態ゆえに、季節によらず年間を通して日本で働くことになっている。彼・彼女らは、その就労形態を「キセツ」と呼んでいる。
- 7) 隼人(16歳 9月3日深夜、国道58号線沿いの宜野湾市内マック内駐車場)の情報。
- 8) 沖縄人労働者は、キセツ先でのリスクを、友人たちと同じ派遣先の同じ勤務時間に仕事に就くことで回避しようとする。しかし、友人とトラブルを起こし、契約満了前に沖縄へ帰る場合が多い(前掲の面接官の話)。この場合の友人とのつながりは、厳しい環境の中で助けあうものではなく、逆に、厳しい環境をより厳しいものにしていく。キセツ先では、仕事のカス抜きも困難であり、親密な関係性も容易に解体するような、人間関係の軋轢がある。このようなキセツ先の問題も、さらに分析する必要がある。
- 9) 厳しさを比較することには意味がない。ここで言いたいのは、厳しさの背景が異なるということ、そのため厳しさの質も異なるということである。
- 10) 「〔良太たちと沖縄の暴走族のチーム名を整理する場面〕[学校の勉強みたいに、覚えるわけじゃないよね]暴走族の名前を覚えるのは、友だちの友だちが[暴走族に]入ってたり、[暴走行為を]実際みたりで覚えた。」(良太 11月28日 国道58号線沿いの浦添市内ローソン前駐車場)
- 11) これは、「中部狂走連盟」というウェブサイトの情報掲示板での書き込みである。なお、このサイトは、携帯電話会社ドコモの携帯電話からのみ閲覧することができる[作成者不明 2007]。
- 12) ここで、若者とはどのような存在なのか、若者であることでどのような固有の生きづらさがあるのかということも、考察に値する重要な課題である。

- 13) 「ギャラリーがいないとやる気がしない、女がいないとやらないよ。男に見せるためにやってない、女に見せるためよ(笑)。(元暴走族の良人先輩 25歳 11月28日深夜 国道58号線沿いの浦添市内ローソン前駐車場)「スピードには魅力はない。(中略)警察との駆け引きが面白いんじゃない?あとギャラリーに見られたりがおもしろいのにな。」(元暴走族の幸成先輩 11月6日深夜 国道58号線沿いの浦添市内ローソン前駐車場)この日、この先輩たちは警察に電話で通報し、後輩たちの暴走行為を盛り上げようとした。彼らにとって、抽象的な世界ではなく、自らが属する共同体で有名になることにリアリティがある。彼・彼女らは、地元を介してつながっており、その共同体で名前を上げるか下げるかこそが、重要な問題となる。
- 14) ヤンキーたちは、たとえば横浜の鶴見には仕事があるということ、そこには沖縄タウンもあり沖縄人がたくさんいること、しかし、そこでの生活には厳しいこともあるということ先輩から学んでいる。鶴見には、沖縄人お断りという居酒屋さえあるという。
- 15) 高い自殺率にもみられるように、日本での労働に耐え切れずに命さえ奪われた沖縄人の若者も少なくない。同郷人のネットワークは、沖縄人にとって最後の生き抜き手段となっているが、それにさえ入れない人たちのなかには、死ぬ(殺される)しかなかった人もいることを、忘れてはならない。
- 16) これは、岸が描いた建設現場の様子からも確認できる。建築労働者になることでアイデンティティを獲得する少年がいる一方で、だれもが建築労働者となることはできず、ダメなヤツはそこから排除されていく。建築現場は、新参者に対して排他的である。ただしここで、次のことが確認されなければならない。岸が描く排他性とは、建築現場でひとり前になるためのテスト期間における排他性、つまり現場に包摂するための排他性である。それは、これからみるリンチ、つまり最初から排除するための排他性とは、目的も機能も異なる。包摂のための排他性には、新参者を包摂するかどうかを見極めるための試行期間が与えられているが、排除のための排他性にはそれが無い。
- 17) むしろ、この葛藤が十分になされさえすれば、引き受ける文化の中身の方はそれほど重要な問題ではないのかもしれない。
- 18) もちろん暴力というかたちをとらない、言語による社会化もある。ヤンキーたちは、言語によって仲間とつながることがしばしば難しく、そこにシゴキが介在する。それが、彼・彼女らの社会化の過程を蔽っていく。
- 19) ただし健太が、排除の暴力として振るわれたリンチをシゴキと認識している可能性もある。だがたとえそうだとすると、建築現場に暴力が蔓延しており、それはシゴキからリンチへ変容しつつあるという本稿の解釈は変わるものでない。
- 20) 苛酷な労働には、この他、(被曝者手帳を要する)原子力発電所での仕事、建築会社でのピンハネ、中学生のキセツ斡旋等がある。保護されていた子どもでさえ、ネオリバはものとして扱ひ、使えないなら容赦なく排除していく。
- 21) 「ネオリバ国家の基本的使命とは、『ビジネスに好適な環境』を作りだし、雇用や社会的福祉への影響は二の次にして、資本蓄積の条件を最適とすること、これにつきる。」[Harvey 2005=2007: 28]
- 22) 沖縄のヤンキーたちにとって、1年以上働き続けることは至難のことである。そうではなく、一定期間働いて(働くことができ)、失業保険をもらうという働き方が一般的である。働くことができるのは長くて半年で、失業してすぐに就ける仕事はない。そのような非正規就労が、彼・彼女らの就



労働環境の常態となっている。しかも2007年10月の法改正によって、失業保険を取得する条件はより厳しく、取得できる額はより少なくなった。

- 23) これは、調査のなかで筆者も経験したことである。パトカーに追走されたが捕まらなかった時、たんなる偶然でしかない出来事を、私だから危機を逃れられたと勘違いしたものである。
- 24) 先で挙げた警察から逃げた事例とは逆に、運悪く捕まった場合であったとしても、なぜこの俺だけが捕まったのかと問うという意味では、代替や比較の不可能性を表現している。また事故に巻き込まれそうになったがなんとか回避できた時、もしくは事故にあってもそれが地元で語り継がれていくことから同様である。

## [文献]

- 新谷周平,2002,「ストリートダンスからフリーターへ」日本教育社会学会編『教育社会学研究』71, pp.151-70.
- Claude, Levi-Strauss,1958,Anthropologie Structurale,Paris: Librairie Plon.(=1972,荒川幾男ほか訳『構造人類学』みすず書房.)
- David Harvey,2005,Space of neoliberalization: Towards a theory of uneven geographical development,Franz Steiner Verlag.(=2007,本橋哲也訳『ネオリベラリズムとは何か』青土社.)
- 岸政彦,1996,「建築労働者になる——正統的周辺参加とラベリング」ソシオロジ編集委員会編『ソシオロジ』41(2), pp.37-53.
- 宮島喬編,2003,『岩波小辞典 社会学』岩波書店.
- 野村浩也,2005,『無意識の植民地主義』御茶ノ水書房.
- Paul E. Willis,1977,Learning to Labour,New York: Columbia university press.(=1996,熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房.)
- 谷富夫,1989,『過剰都市化社会の移動世代——沖縄生活史研究』溪水社.
- 桃原一彦,2007,『『観光立県主義』と植民地都市の『野蛮性』』野村浩也編『植民者へ——ポストコロニアリズムという挑発』松籟社, pp.254-316.
- 作成者不明,2007,「中部狂走連盟」(<http://11.xmbs.jp/okinawa1/>,2007.11.6).
- 佐藤郁哉,1984,『暴走族のエスノグラフィ』新曜社.
- ,1985,『ヤンキー・暴走族・社会人』新曜社.
- 上間陽子,2007,『『伝統』の再創造——エイサーへとりくむ若者たちへの聞き取りから』教育科学研究会編『教育』11, pp.75-81.
- 上之二郎,1980,『ドキュメント暴走族(part1)』二見書房.
- 打越正行,2008,『裁判で敗訴した<暴走族>/裁判を流用した<暴走族>——走れない<暴走族>の排除と抵抗』広島国際学院大学現代社会学部『現代社会学』9, pp.25-40.
- 瓜田吉寿,1975,『俺たちには土曜しかない』二見書房.
- (うちこし・まさゆき 首都大学東京大学院人文科学研究科)

**【欧文要約】**

**I hate Okinawa coz no job here, and Okinawan, too: Okinawan Yankees' communitarity and neo-liberalism**

*UCHIKOSHI, Masayuki*

*Tokyo Metropolitan University*

*karp@mail.goo.ne.jp*

In this essay, I analyzed Okinawan communitarity which Okinawan youth formed in their hometown and working society, and described a part of exclusion in contemporary society. Main object in this essay is Yankees, including Boso-zoku, who have dropped out from junior high school or high school and now take unstable job. Yankees are underclass youths who have base of life in their hometown and directly share various resources with their members. I advanced discussion about socialization involving harsh trainings in Yankees communitarity, as concrete example which were directly shared and taken over the resources, by setting out analyzing concept, neo-liberalism. In youth centers of Eisaa, the socialization cannot work well because of rejecting localization by neo-liberalism, and in building sites, each worker became individualized and communitarity are being broken down, I confirmed. As a result, harsh training as socialization, which brings up new members in the community, was ending up lynching for just exclusion to them. Neo-liberalism vigorously pushed forward economical exploitation, and in the end broke into Yankees communitarity. And first of all, it exploited marginal youths like Yankees. Moreover analyzing in detail communitarity in which exploitation, exclusion and rebellion are fiercely competing, neo-liberalism exploit and exclude Yankees as substitutable labor power, whereas Yankees community and practices in it reproduce non-substitutable members because they generated contingency and irrationality. Ultimately I argued for Japan and Japanese what significance these discussions had.

Key words: yankees, Okinawa, neo-liberalism